

# 大学生の自己調整能力と児童期の母親の養育態度

竹村 明子・角 江梨花

仁愛大学人間学部

The relationship between Japanese adolescents' self-regulation and perceptions about their mothers' attitudes toward them during childhood.

Akiko TAKEMURA Erica KADO

Jin-ai University

Self-regulation is the ability to control one's own behavior, emotions, or thoughts in accordance with the demands of a given situation. It predicts adaptation to the daily life and future success for adolescents. The purpose of this study was to examine the relationship between self-regulation in adolescents and their perceptions of their mothers' attitudes toward them during childhood. One hundred fifty five university students were asked to complete a questionnaire about their degree of self-regulation and their perception of their mothers' attitude toward them during their childhood. The results revealed that the more students perceived that their mothers accepted them, the more they improved their self-regulation. On the other hand, the perception of having a controlling mother was not associated with current self-regulation. These findings suggest that experiencing an accepting parenting style by one's mother has a positive influence on self-regulation during adolescence.

キーワード：self-regulation, maternal parenting style, adolescence

## 背景と目的

自己調整 (self-regulation) とは、場面や状況に対応して、自らの行動や感情、認知を調整し、適切に行動できる機能のことである。自己調整は、個人の現在および将来の適応を予測し、対人関係の良好さとも関連する。そのため、発達心理学および教育心理学分野において注目される概念である。このような自己調整機能は、幼児期・児童期において子どもが養育者の規範や考え方を内在化することにより発達すると考えられており、自己調整の発達にとって親の養育態度は重要な影響要因であることが示唆されている。しかし、子どもの頃の養育者の養育態度が、青年期の自己調整にまで影響するのかわかりではない。青年期は親から心理的に自立する時期であり、養育者の影響は減衰していく可能性がある。一方で、幼児期・児童期にひ

とたび内在化され形成された自己調整機能は、その後の青年期においても維持される可能性もある。そこで、本研究は、子どもの頃の養育者の養育態度と、青年期の自己調整機能との関係について検討することを主な目的とする。

以下では、自己調整とは何か、親子関係と自己調整の関係について明らかにされていること、残された課題、本研究の目的について説明する。

## 1. 自己調整とは

自己調整とは、上述したように、状況に合わせて自己を調整する機能と定義される。このような自己調整は単一概念ではなく、複数の機能から構成される概念である。例えば柏木 (1988) は、自己調整を2側面に分け、一つ目の自己主張 (Self-assertion) 的機能を「自己の欲求や意志を明確に持ち、これを他者の前

で表現し主張すること」と定義し、もう一つの自己抑制的側面 (Self-control) を「集団場面で自分の欲求や行動を抑制・制止しなければならないとき、それを抑制すること」と定義している。さらに東 (東・柏木, 1989; Azuma, 1984) は、柏木 (1988) の2側面に加え、日本の子どもたちの自己調整には、自己主張と自己抑制の側面を併せ持つ「がまん」という側面があると述べている。例えば、おもしろくない課題でもがんばってやるという子どもたちの努力は、忍耐という自己抑制的な側面もあるが、自分にとってこの課題をやり遂げることは大事だという価値観にもとづく自己主張的側面もある。東 (東・柏木, 1989) は、このような「がまん」という側面は、自己主張や自己抑制とは独立した概念であり、日本の子どもの自己調整機能の中核的な特性であると指摘している。まとめるなら、自己調整には自己主張・自己抑制・がまんの少なくとも3つの側面があることが示唆される。

しかし、これまでの自己調整研究では、自己調整を2側面に分類する研究と3側面に分類する研究が混在しており、研究結果に一致が見出されていない (竹村・仲, 2013)。例えば、2側面に分類する研究者として、Heckhausen & Schulz (1995) は、自己 (目標・理想) に合わせ状況を変える Primary Control (自己主張的) と、状況に合わせて自己 (目標・理想) を変える Secondary Control (自己抑制的) という2側面で分類している。また Brandtstädter & Renner (1990) は、高齢期の発達研究の立場から、目標に現状を近づける努力 Assimilative Coping (自己主張的) と、心身機能が衰退した現状に合わせて目標を引き下げる努力 Accommodative Coping (自己抑制的) という概念を提唱している。一方、3側面に分類する研究者として、Connor-Smith, Compas, Wadsworth, Thomsen, & Saltzman (2000) は、目標を実現するために状況を変える Primary Control (自己主張的) と、状況を受け入れ目標を諦める Disengagement (自己抑制的)、目標を実現するために自分を変える Secondary Control (がまん) の3側面に分類している。このような研究背景を基に、森下・前田 (2015) は、自己調整を「自己主張」「自己抑制」「根気我慢」の3つの側面で捉えようと試みている。本研究では、この森下・前田 (2015)

を参考に自己調整が3因子構造か否かについても検討を行う。

## 2. 自己調整と母親の養育態度

これまで自己調整の発達研究は、主に幼児期・児童期の子どもの対象として行われてきた。そして、その結果から、養育者の養育態度が子どもの自己調整に影響することが報告されている。

Baumrind (1967, 1971) は、養育者の養育態度を、応答性 (受容) と統制の2軸の高低により、権威的 (authoritative; 受容と統制のいずれも高く、子どもと受容的関わりを持ちながらも、柔軟に子どもを統制するタイプ)、権威主義的 (authoritarian; 受容が低く統制が高く、子どもを服従させるタイプ)、許容的 (permissive; 受容は高いが統制が低く、子どものような行動も許すタイプ) の3つに分類した。そして、子どもの自己調整機能は、権威的養育態度の養育者の子どもで高く、権威主義的および許容的な養育態度の養育者の子どもで低い事を報告している。この結果に関して、Baumrind (1967, 1971) は、権威主義的および許容的な養育態度の親は、子どもが自分で行った行動の結果に対して責任を取る機会を奪ってしまい、それが子どもの自己調整機能の発達を妨げていると解釈している。すなわち、権威主義的養育態度 (統制的養育態度) の親は子どもの行動を常に統制してしまうことにより、許容的養育態度 (甘やかしの養育態度) の親は子どもに子ども自身の責任を自覚させないことにより、子どもが自己調整機能を発達させる機会を奪っていると指摘している。

日本において、中道 (2013) は、母親が権威主義的養育態度 (統制的) や許容的養育態度 (甘やかしの) をとる場合、権威的養育態度 (受容と統制が高い) をとる場合より、幼児の自己抑制得点が低いこと、自己主張では養育態度による違いは見られないことを報告している。また戸田 (2006) は、母親が許容的な養育態度をとるほど幼児の自己主張が低くなること、森下 (2000) は、母親の統制的養育態度が子どもの自己抑制の低さに影響することを見出している。その他、柏木 (1988) は、社会や文化の違いに注目し、日本では自己主張的側面より自己抑制的側面を母親が重視

するために、子どもの自己抑制的側面は年齢と共に増加するものの、自己主張的側面は5歳まで急激に伸びた後停滞してしまうことを明らかにしている。また、男児と女児による違いも指摘されており、森下(2001)は、父母共に受容的な養育態度は、女兒の自己抑制の発達にとってプラスに働くこと、父母共に統制が緩やかな場合は、女兒の自己抑制の発達にプラスの影響を与えるが、男児の自己主張の発達にマイナスの影響を与えることも示している。

このように、養育者の養育態度は、幼児期・児童期の自己調整に影響を与えることが示されているが、青年期の自己調整にまで影響が及ぶのか否かについては明らかではない。数少ない研究の中で、森下・前田(2015)は、女子大学生を対象として、子どもの頃の母親の養育態度と大学生の自己制御の関係について検討し、母親の受容的養育態度が大学生の自己調整(根気我慢や自己抑制)に正の影響を与えること、母親の統制的養育態度の影響は見られないことを示している。そこで本研究では、男女の大学生を対象として、森下・前田(2015)と同様の結果が見いだされるか検討する。

### 3. 本研究の目的

目的1:自己調整の因子構造について、柏木(1988)および東(東・柏木, 1989)が述べる通り、「自己主張」および「自己抑制」、「がまん」の3つの側面が見いだされるか検討する。森下・前田(2015)は、自己調整を「自己主張」「自己抑制」「根気我慢」の3つの側面で分類した自己制御尺度を作成し検証しているが、異なるサンプルでも同じ因子構造が得られるのか確認をする必要がある。同様に、親の養育態度を測定する尺度の因子構造に関しても確認を行う。

目的2:大学生が認知する子どもの頃の養育者の養育態度が、彼らの自己調整に与える影響について検討する。

## 方 法

### 1. 調査対象者

大学生 155 名 (男性 56 名), 平均年齢 20.28 歳 (標

準偏差 SD= .92, 年齢幅 19-25 歳)。

### 2. 調査手続き

質問紙法を用い、母親の養育態度および大学生の自己調整についてデータを収集した。具体的には、大学の講義の一部を利用し、質問紙を配布し、その場で回答を求め回収した。

### 3. 調査項目

1) **社会的デモグラフィック要因** 年齢, 性別, 家族構成について回答を求めた。

2) **子どもの頃の母親の養育態度** 大学生が認知する、子どもの頃の母親の養育態度を測定するために、森下・前田(2015)によって作成された「母親の養育態度尺度」の一部を使用した。本尺度は、「受容」「統制」「甘やかし」「友だち重視」の4因子から構成される尺度であるが、「受容」12項目(「子どもの頃母親から理解され受け入れられていた」という大学生の認知を表す)、「統制」7項目(「子どもの頃母親から自分の考えや行動をコントロールされていた」という大学生の認知を表す)を使用した。質問紙では、先ず“あなたが小学生の頃のお母さんまたは、お母さんに代わる人(例、祖母など)の養育態度を思い出してください。その人は次の項目にどれくらい当てはまりますか”と教示した後、各質問項目について“あてはまらない”(1点)から“あてはまる”(4点)の4段階で評定を求めた(質問項目は Table 1 参照)。

3) **大学生の自己調整** 大学生の自己調整を測定するために、森下・前田(2015)により作成された自己制御機能尺度を使用した。本尺度は3因子からなる尺度であり、「自己主張」11項目(大学生が自分自身の考えや意見を他者に伝えることができる自己調整機能の高さを表す)、「根気我慢」9項目(大学生が諦めずに課題をやりとおす自己調整機能の高さを表す)、「情動抑制」4項目(大学生が自分の感情をコントロールできる自己調整機能の高さを表す)から構成される。各質問項目について、“あてはまらない(1点)”から“あてはまる(4点)”の4段階で評定を求めた(質問項目は Table 2 参照)。

結 果

1. 各尺度の因子分析結果

1) 母親の養育態度の因子構造 母親の養育態度尺度の因子構造を確認するために、先ず全19項目について、因子数を2因子に固定し因子分析を行った。その結果、2つの因子に対して因子負荷量が.35以下の項目“お願い事がある時、なぜそうしたいのか理由を聞かれた”1項目が見出された。そこで当該項目を除外し、再度因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った結果、想定される2因子構造が確認された(Table 1参照)。第1因子は“私の悩みや心配事を理解してくれた”など、母親から理解され受け入れられていたことを表す11項目から構成されており、「受容」と確認された。第2因子は“私に何かあるといけなから、あまりよそへ行かさないようにした”など、母親から行動を監視・統制されていたことを表す7項目から構成されており、「統制」と確認された。Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した結果、「受容」は $\alpha =$

Table 1 児童期の母親の養育態度尺度の因子分析結果(主因子法, バリマックス回転)

項 目	因子負荷量	
	F1	F2
<b>F1 受容的養育態度 (<math>\alpha = .90</math>)</b>		
心配事をじっくり聞いてくれるので気持ちが楽になった	.77	.01
私のなやみや心配事を理解してくれた	.76	-.15
聞いたことに対してきちんと答えてくれた	.76	-.05
私が困っているときには元気づけてくれた	.73	-.20
私の言うことに耳を傾けてくれた	.73	-.22
一緒にいると気持ちが楽になった	.72	-.18
話したいことがある時は、話を聞く時間を十分に作ってくれた	.70	-.13
私がどんな物の見方をしているのか理解しようとした	.67	-.07
私にたびたび話かけた	.55	-.05
私と一緒に、外出や旅行をするのが好きだった	.54	.04
悪いことをした時は叱るだけではなく、なぜそんなことをしたのか理由を聞かれた	.50	.00
<b>F2 統制的養育態度 (<math>\alpha = .69</math>)</b>		
私に何かあるといけなから、あまりよそへ行かさないようにした	-.06	.67
私が長い時間、外で過ごすことを認めなかった	-.07	.61
私が何をすべきかいつも私に指図したがった	-.22	.50
少しでも悪いことをしたら怒られた	.19	.44
私が家の手伝いをしないと腹を立てた	-.05	.43
友だちと遊んでばかりいないで勉強しなさいと言われた	-.12	.40
友だちとのケンカにすぐ口を出してきた	-.05	.39
累積寄与率 (%)	29.06	39.79

.90, 「統制」は $\alpha = .69$ であった。この結果は森下・前田(2015)の結果(順に、 $\alpha = .92, .71$ )と同様の結果であり、内的整合性は充分であると判断した。これらの結果から、尺度の信頼性が確認され、各因子に該当する質問項目の平均値を算出し因子得点とした。

2) 大学生の自己調整の因子構造 大学生の自己調整を測定する自己制御機能尺度(森下・前田, 2015)の因子構造を確認するために、先ず、全24項目について因子数を3に固定し因子分析を行った。その結果、

Table 2 大学生の自己調整尺度の因子分析結果(最尤法, プロマックス回転)

	因子負荷量		
	F1	F2	F3
<b>F1 自己主張 (<math>\alpha = .87</math>)</b>			
多数派の意見とは違っても自分の意見を言う	.83	-.12	.08
他の子と自分の意見が違っていると臆せずに主張できる	.82	-.04	.17
周囲と違っていても自分なりの考えをはきける述べる	.79	.10	-.20
友だちの考えに流されることなく、自分の考えを言うことができる	.74	.17	-.03
自分の思ったことをなかなか口に出して言えない(R)	-.67	.02	.14
たとえ言い難くても間違っていることは指摘できる	.61	-.04	.11
嫌なことは、はっきりいやと言え	.57	.09	-.20
話し合いの場で(尋ねられなくても)進んで自分の意見を述べる	.52	-.06	.25
友だちが嫌がらせや悪ふざけなどをしている時でも、よくないと伝えることができない(R)	-.46	.20	-.08
仕事・課題や遊びなど、周囲の人にいちいち聞かずに自分のアイディアで進めることができる	.45	.18	.10
自分が並んでいる前に誰かが入り込んで来たら、相手に注意できる	.38	-.08	-.07
<b>F2 根気我慢 (<math>\alpha = .73</math>)</b>			
時間がかかっても最後まで頑張る	-.04	.63	-.06
周りから決められた役割が困難なことでも、すぐにあきらめたりせずに、我慢してやりとおす	.10	.57	.01
やりたくないことでも、やらないといけなときはやる	.07	.57	-.09
集団の中で、自分の決められた役割がある時は、どんな誘惑にも負けずに取り組む	-.04	.56	-.08
相談や大勢で話している時、自分の順番を待てる	.01	.47	.14
相手の話を最後までしっかり聞く	-.04	.43	.05
皆でやるべき課題がある時は、遊びたい衝動に駆られても我慢できる	-.11	.40	.19
きまりやルールを守る(ズルやごまかしをしない)	-.28	.37	.20
<b>F3 情動抑制 (<math>\alpha = .63</math>)</b>			
悲しい、くやしいこと、つらいことなどの感情を露骨に表したりしない	-.05	-.11	.70
納得のいかないことがあった時、すぐにかんしゃくをしたりせず、落ち着いて話すことができる	.07	.13	.58
嫌なことがあっても、人や物に八つ当たりしない	.04	.18	.42
因子間相関	F2	.28	
	F3	.18	.35

すべての因子に対して因子負荷量が低い項目“友だちから間違いを指摘されたら、素直に自分が間違っただことを認める”が見出された。そこで、当該項目を除外し、再度因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った結果、想定された3因子構造を得た（Table 2 参照）。第1因子は“多数派の意見とは違っていても自分の意見を言う”など、自分自身の考えや意見を主張する内容の項目から構成されており、「自己主張」と確認された。第2因子は“時間がかかっても最後まで頑張る”など、最後まで諦めずに与えられた課題をやりとす内容の項目から構成されており、「根気我慢」と確認された。第3因子は“悲しい、くやしいこと、つらいことなどの感情を露骨に表したりしない”など、自分の感情をコントロールする内容の項目から構成されており、「情動抑制」と確認された。各因子について Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した結果、自己主張は  $\alpha = .83$ 、「根気我慢」は  $\alpha = .73$ 、「情動抑制」は  $\alpha = .63$  であった。この結果は、先行研究（森下・前田, 2015）の結果と同様の値であり（上述した順に  $\alpha = .88, .80, .65$ ）、情動抑制の  $\alpha$  係数の値は低いものの、分析に耐えられる値であると判断した。これらの結果から、尺度の信頼性が確認され、各因子に該当する質問項目の平均値を算出し、各因子の得点とした。

## 2. 基本的統計量

母親の養育態度（受容・統制）、大学生の自己調整（自己主張・根気我慢・情動抑制）について、性別に平均値と標準偏差を算出し、Table 3 に示した。各変数について、 $t$  検定を用いて性差を調べたが、統計的に有

Table 3 各変数の平均値と標準偏差および各変数間の相関係数

	男性		女性		養育態度		自己調整	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	受容	統制	自己主張	根気我慢
母親の養育態度								
受容	2.83	(.54)	3.00	(.58)				
統制	2.12	(.49)	2.14	(.52)	-.19*			
大学生の自己調整								
自己主張	2.63	(.51)	2.48	(.55)	.24**	-.04		
根気我慢	3.14	(.38)	3.18	(.41)	.39***	-.10	.16	
情動抑制	2.73	(.73)	2.69	(.64)	.31***	-.04	.18*	.36***

注) *M* = 平均値, *SD* = 標準偏差値を表す。

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

意な差は見いだされなかった。

## 3. 母親の養育態度と大学生の自己調整の関係

1) 相関分析結果 先ず、性別に各変数間の相関係数を算出し、性による違いについて検討した。しかし、性差は見出されなかったため、以後の分析は男女を含めて行った。各変数間の相関係数を算出し、結果を Table 3 の右側に示した。母親の養育態度（受容・統制）と大学生の自己調整（自己主張・根気我慢・情動抑制）の間の相関関係について調べた結果、母親の養育態度の受容と、大学生の自己調整の3因子（自己主張・根気我慢・情動抑制）との間に有意な正の相関が見いだされた。具体的には、母親の養育態度が受容的なほど、大学生は自分自身の考えや意見を伝える傾向（自己主張）が高く ( $r = .24, p < .01$ )、与えられた課題を達成する傾向（根気我慢）が高く ( $r = .39, p < .001$ )、自分の感情をコントロールする傾向（情動抑制）が高い ( $r = .31, p < .001$ ) ことを示していた。母親の統制的養育態度と大学生の自己調整の間には、有意な値は見出されなかった。

2) パス解析結果 子どもの頃の母親の養育態度と大学生の自己調整の関係を検討するために、男女を含めて、養育態度2因子（受容・統制）を独立変数、自己調整3因子（自己主張・根気我慢・情動抑制）を従属変数とする共分散構造分析を Amos 23 を用いて行った。先ず母親の養育態度2因子から大学生の自己調整3因子に至るすべてのパスを想定したが、母親の養育態度のうち統制から自己調整3因子に至るパスが有意な値を示さなかった。そこで、これらのパスを除外した結果、Figure 1 に示したパスを得た。モデルとデータの適合度は、 $\chi^2 = 2.57, df = 5, p > .05$ , GFI = .99, AGFI = .98, CFI = 1.00, RMSEA = .00 であり、良好な値であった。詳しく述べると、先ず母親の養育態度のうち受容から、大学生の自己調整3因子に至るすべてのパスが有意な正の値を示した。具体的には、子どもの頃に母親から理解され受け入れられたと認知する大学生ほど、自分自身の考えや意見を伝える傾向（自己主張）が高く ( $\beta = .24, p < .01$ )、与えられた課題をやりとげる傾向（根気我慢）が高く ( $\beta = .39, p < .001$ )、自分の感情をコントロールする傾向（情動抑制）

が高い ( $\beta = .31, p < .001$ ) ことを示していた。

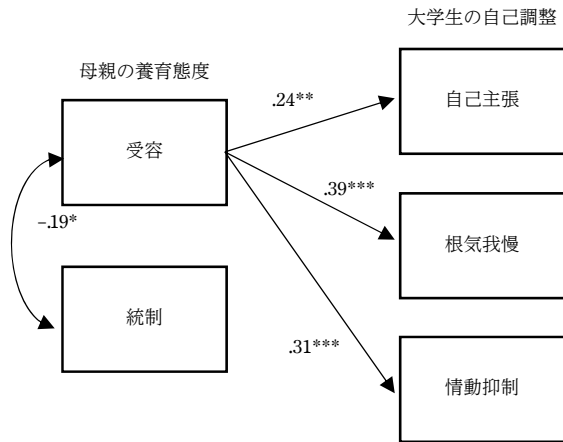


Figure 1. 母親の養育態度と大学生の自己調整  
 $\chi^2 = 2.57, df = 5, p > .05, GFI = .99, AGFI = .98,$   
 $CFI = 1.00, RMSEA = .00$   
 注) 誤差項と誤差間の相関は省略した。  
 \*  $p < .05, ** p < .01, *** p < .001$

## 考 察

### 1. 自己調整の3因子構造

自己調整の因子構造に関して、森下・前田 (2015) の自己制御尺度を用いて因子分析をした結果、想定された3因子構造であることが確認された。すなわち、自己調整のうち根気我慢は、自己主張や情動抑制と関連はあるものの、独立した因子であることが示されたのであり、自己調整は少なくとも3因子に分かれる事が示唆される。

これまで自己調整の研究分野では、根気我慢のように、自己主張的側面と自己抑制的側面を併せ持つ自己調整は、分析時において自己主張または自己抑制に含まれてしまい、独立して抽出することができなかった。そのため、自己調整が3因子構造であることを確認することが困難であった。しかし今回、本研究において、森下・前田 (2015) と同様に、根気我慢が独立した因子であること、自己調整が3因子構造であることを確認できた。これは、今後の自己調整研究にとって重要な意味を持つ結果であると言える。

### 2. 母親の養育態度と大学生の自己調整

子どもの頃の母親の養育態度と大学生の自己調整の

関連を調べた結果、母親の養育態度のうち受容的側面と、大学生の自己調整の3つの側面との間に有意な正の関係が見いだされた。この結果は、“子どもの頃に母親が自分を理解し受け入れてくれた”と大学生が認知するほど、彼らは自分の欲求や意志を他者に主張する機能（自己主張性）が高く、自己の欲求や行動を抑制する自己抑制性する機能（自己抑制性）も高く、自己主張的側面も自己抑制的側面も併せ持つ我慢強さ（根気我慢）も高いことを示している。森下・前田 (2015) は、子どもの頃の母親の受容的養育態度が高いほど、大学生の根気我慢および情動抑制が高いという結果を報告しており、本研究は彼らの結果を支持している。加えて本研究は、母親の受容的養育態度が大学生の自己主張性にも影響を与えているという新しい知見も見出しており、意義ある研究であると言える。自己調整は、自分で自分自身を律するものであり、社会や周りの人の規範や考えを内在化することにより発達すると考えられている (Grolnick & Farkas, 2002)。子どもの頃に母親が自分を理解し受け入れてくれたという経験は、他者に対する信頼や尊敬を高め、他者の規範や考えを受け容れやすくし、翻ってそれが子どもの自己調整能力の発達につながったと考えられる。母親の受容的養育態度は、幼児期だけでなく、大学生の自己調整発達にとっても重要な要因であることが明らかとなった。

ところで、母親の統制的養育態度に関して、Baumrind (1961, 1971) の幼児を対象とした研究では、親の受容的養育態度も統制的養育態度も、子どもの自己調整発達に重要なことを示唆していた。これに対して、大学生を対象とした本研究や、森下・前田 (2015) では、大学生の自己調整には、子どもの頃の母親の受容的養育態度のみが影響し、統制的養育態度からの影響が無いことを示していた。なぜこのような違いが生じたのか、本研究では明らかにできなかったが、発達段階による違いや研究方法の違いが反映した可能性が考えられる。すなわち、親との関係が密接な幼児にとって、母親の統制的な態度は、幼児が社会的規範を内面化することを促進し、彼らの自己調整の発達を促したが、親から心理的に自立し始めている大学生にとって、母親の統制的な態度は、大学生の社会的規範の内

面化を促進せず、そのため彼らの自己調整に影響しなかったのかもしれない。また、母親の養育態度の測定について、Baumrind (1961, 1971) は母親を対象に測定しているのに対して、本研究や森下・前田 (2015) は大学生を対象に過去の母親の養育態度について質問しており、母親の養育態度に関する、母親自身と大学生の認知の違いが反映された可能性もある。この違いに関する検討は今後の課題として残った。

### 3. 本研究の問題点と今後の課題

本研究の限界として以下の点を挙げる事ができる。第1に、本研究は横断研究であり、因果関係を特定できないことが問題として指摘される。本研究の目的は、子どもの頃の母親の養育態度が、大学生の自己調整や自己開示に与える影響について明らかにすることであった。しかし、本研究では、現在の大学生が認知する“子どもの頃の母親の養育態度”を測定しており、このような認知は現在の大学生の状況により歪められている可能性がある。すなわち、現実の“子どもの頃の母親の養育態度”と大学生の自己調整の関係を検討しているわけではない。よって、この因果関係を明らかにすることは、今後の課題である。第2に、本研究は、母親の養育態度のみを分析対象とし、父親の養育態度を分析対象としていない点が挙げられる。子どもの自己調整への影響は、父親と母親では異なることが示唆されており、今後は父母の養育態度についても検討する必要があるだろう。

### 引用文献

- Azuma, H. (1984). Secondary control as a heterogeneous category. *American Psychologist*, **39**, 970-971.
- 東洋・柏木恵子 (1989) 教育の心理学 有斐閣.
- Baumrind, D. (1967). Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, **75**, 43-88.
- Baumrind, D. (1971). Current patterns of parental authority. *Developmental Psychology*, **4**, 1-103.
- Brandtstädter, J., & Renner, G. (1990). Tenacious goal pursuit and flexible goal adjustment: Explication and age-related analysis of assimilative and accommodative strategies of coping. *Psychology and Aging*, **5**, 58-67.

- Connor-Smith, J. K., Compas, B. E., Wadsworth, M. E., Thomsen, A. H., & Saltzman, H. (2000). Responses to stress in adolescence: Measurement of coping and involuntary responses. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **68**, 976-992.
- Grolnick, W.S. & Farkas, M. (2002). Parenting and the development of children's self-regulation. In M.H. Bornstein (Ed.), *Handbook of Parenting. Volume 5: Practical Issues in Parenting* (pp. 89-110). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Heckhausen, J., & Schulz, R. (1995). A life-span theory of control. *Psychological Review*, **102**, 284-304.
- 柏木恵子 (1988) . 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に— 東京大学出版会 .
- 森下正康 (2000) . 幼児期の自己制御機能の発達(2)—親子関係と幼稚園での子どもの特徴— . 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要 , **10**, 117-128.
- 森下正康 (2001) . 幼児期の自己制御機能の発達 (3) —父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与えるか— . 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要 , **11**, 87-100.
- 森下正康・前田百合香 (2015) . 児童期の母親の養育態度としつけ方略が自己制御機能の発達に与える影響. 京都女子大学発達教育学部紀要 , **11**, 99-108.
- 中道圭人 (2013) . 父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響. 静岡大学教育学部研究報告. 人文・社会・自然科学篇 , **63**, 109-121.
- 竹村明子・仲真紀子 (2013) . 二次的コントロール概念の多様性と今後の課題. 教育心理学研究 , **60**, 211-226.
- 戸田須恵子 (2006) . 母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について. 釧路論集 —北海道教育大学釧路校研究紀要— , **38**, 59-6.

### 付記

本研究は第二筆者 (角江梨花) の卒論研究「児童期の母親の養育態度と誘導方略が子どもの自己制御機能の発達に与える影響」を再解析したものである。

本研究の一部は仁愛大学共同研究費の助成を受けた。

### 要約 (和文抄録)

自己調整とは、場面や状況に対応して、自らの行動・感情・認知を調整できる機能のことであり、良好な適応や対人関係、将来の成功を予測すると言われている。本研究は、このような自己調整の発達のメカニズムを明らかにするために、子どもの頃の母親の養育態度に

注目し、大学生 155 名を対象に母親の養育態度と彼らの自己調整について測定した。まず、自己調整は自己主張・情動抑制・根気我慢の 3 因子に分かれることを確認した後、大学生が認知する子どもの頃の母親の養育態度が彼らの自己調整に与える影響について分析した。その結果、子どもの頃母親に理解され受け入れられていたと認知することは、大学生の自己調整の 3 側面すべてを促していることがわかった。一方、子どもの頃母親から統制されていたと認知することは、大学生の自己調整に影響を与えていないことがわかった。これらの結果より、若者の自己調整機能の発達における、親の受容的養育態度の重要性が示唆された。

キーワード：自己調整，母親の養育スタイル，青年期